第 61 回神奈川会イベント

横浜の「海外交流活動」の足跡を訪ねます

今日は快晴に恵まれ 33 名の参加をいただき有り難うございました。
10 時に桜木町南改札に集合し、神奈川会代表の長澤さんより挨拶、飯田さんより行程説明後いよいよ出発、汽車道を経由し JIKA「海外移住資料館」を見学、3 階の「レストラン・ポートテラス・カフェ」で昼食後「神奈川県立歴史博物館」と「横浜市開港記念会館」を見学して予定通り 16 時に現地による解散をしました、全員怪我も無く無事見学会を終えることができ参加者の皆さんに心より感謝しております。

さて、JIKA「海外移住資料館」では日本人の真面目さをかわれ、サトウキビ、コーヒー豆の栽培に日本人移住が開始され、明治 18 年から 100 年間で 76 万人もの邦人が北米、南米に移住して行ったと言われています、その中で広島県が一番多く約 11 万人、沖縄が 9 万人と西日本の人達が多かったと記されていました、当時日本では一日働くと 20 銭で 30 日働いても 6 円にしかならないのに、米国では賃金が月 15 円で日曜日は休みと、この上もない好条件で海外に移住して行ったと思われます、でもそれだけ日本が貧しかったのでは無いかと考えられます。その後、密林を開拓し重労働をしながら現地の中に溶け込んで行ったと思われます、色々展示されていた展示品の中に苦労の跡が偲ばれます、昭和 40 年に移住者を乗せた日本丸が横浜を出港して行ったのが最後との事でした。

レストラン・ポートテラス・カフェでの昼食、赤レンガ倉庫を見ながらの食事、ブラジル料理、ベトナム料理等々さすが JIKA だけあって色々な種類の国の料理があり、色々な国の人達が働いておられ、海外交流の場としての役割を果たしていたなと感じました。

「神奈川県立歴史博物館」では特別陳列として「屏風をひらけば～神奈川県立歴史博物館所蔵の屏風絵」が展示され、目玉の作品は元信印（四季花鳥図）で狩野派の基礎を築いた狩野派二代元信の印が押された作品で、秋冬の景色の中、鳥たちが鳴き交わし、滝が流れ落ちる、そんな音が聞こえそうな作品でした。
古代、中世、近世、近代、現代、と神奈川県の古代から現代にいたる人々の生きざまや文化など展示されており、特に中世、都市鎌倉と中世びとの中で仏教各宗派が大陸との交流を通じて工芸品、彫刻、絵画、石造物等、人の繋がりを感じました。横浜開港と近代化では、ペリーの来航など、横浜の当時の人々が開港場横浜と世界に開かれて行ったさまが目に浮かぶようでした。

最後に「横浜市開港記念会館」を見学しました、開港記念会館の時計塔は「ジャック」と呼ばれ「キング」(神奈川県庁本館)「クイーン」(横浜税関)と並び横浜三塔として有名です。開港記念会館の講堂は毎月 15 の日に扉が開かれ市民に公開されています、戦後アメリカ軍によって接収され当時はこの講堂は米兵の映画館になって居たそうです。特にここの目玉はステンドグラスで、2 階広間ステンドグラスは呉越同舟、鳳凰、箱根越え、の 3 枚からなり表から見るのと裏から見るのでは、それぞれ雰囲気が変わりそれなりの美しさが感じられました。
また貴賓階段室ステンドグラスは、ペリー再来航時に乗った来た船でポーハタン号と言い、この船にアメリカ国旗が掲揚されていたため、開港記念会館は駐留米軍接収期間中大変大切に使用されていたようです、また午後 3 時頃になると太陽が裏側から当たりそれは鮮やかに変身します、階段を下りた場所から見ると下側からからの景色と上側からの景色とではその景色自体が様変わりするそうです。

人は歩いて、歩いて、腹が減つたら飯を食い、健康を維持し
人は先人達の生きざまから知識と教養を得
人は過去の歴史から未来を創造する
そんな横浜の「海外交流活動」の一環を垣間見た見学の一日でした。

文　章	熊田 昌秀
写　真	榎原 勝・富山友次
編　集	富山友次